

「男、突っ走る！」

第15回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

井有西佐尾	藤五鬼宮	杉中高松志山田濱門	木
深賀澤藤形	野川頭田	山岡階井田辺崎口野	内
武隆安	真孝美春	優壯康 悠一良寧賢	雅
彦勇雄篤代	弓之彩奈	菜吾行武喜磨樹々哉	也
(39)	(17)	(17)	(17)
(48)	(17)	(17)	(17)
(53)	(17)	(17)	(17)
(59)	(17)	(17)	(17)
(53)	(17)	(17)	(17)
中央高校生徒会主任	中央高校2年6組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒
中央高校2年2組主任	中央高校2年6組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒
中央高校2年2組主任	中央高校2年6組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒
中央高校2年4組主任	中央高校2年5組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒

1 中央高校・校門前（朝）

生徒たちが登校している――自分の名前が書いてあるポスターを持って、雅也が挨拶運動をしている。

雅也「おはようございます。生徒会会計に立候補しました木内雅也です。よろしくお願
いします。おはようございます」

と、井深が昇降口から出てくる――挨拶運動をする雅也を見守るように眺めている。

雅也「おはようございます！ おはようございます。生徒会会計に立候補しました木内雅也です。よろしくお願
いします。ありがとうございます。ありがとうございます」

2 同・S R 2 教室

賢哉、悠喜、壮吾が話している。

悠喜「そうか、あいつ辞めたのか」

賢哉「クラス変わっても、結局向こうで馴染めなかったんだろう」

悠喜「きのしゅん、これからどうするんだろ

うな」

賢哉「さあな。昨日木内とも話したけど、多

分どっかの通信制に行くんじゃないか」

壮吾「まあ、それが妥当か」

賢哉「生徒会選挙の真っ只中に言うか迷った

けど、まあ早い方が良いと思って」

と、雅也が入ってくる。

雅也「おはよう」

賢哉「お前、朝からよくやるな」

雅也「そりゃ、大事な選挙だもの」

悠喜「俺たちは、全力で木内を応援する」

雅也「ありがとう。本当によろしく頼みます

わ」

賢哉「昨日は悪かったな」

雅也「え？」

賢哉「きのしゅんのこと」

雅也「ああ……そのことか。大丈夫。いずれ

は分かることだしね」

壮吾「これで、大事な清き一票が一つ失われ

たつてわけだ」

雅也「水臭いよね、きのしゅんも、一言言ってくれたら良いのに。まあ、俺も連絡しなかったのが悪いんだけどさ」

賢哉「クラス離れてから、なかなか話すことなかったし、そもそもお前も忙しかったかな。きのしゅんも、忙しいお前に相談しちゃ悪いと思っただろ」

雅也「……」

賢哉「まあ、別に二度と会えなくなるわけじゃないんだ。ブログだって続けるだろうし、コメントしてやれば、あいつも安心するだろう」

雅也「まあ、それはそうかもしれないけど……。でも、やっぱり何か寂しいよね。きのしゅんがいなくなると」

賢哉「……」

悠喜「……」

壮吾「……」

雅也「去年は毎日のように顔合わせて話して

たのに、クラスが変わるこんなにも接点なくなるんだね……もつと、きのしゅんとの時間作れば良かったかな」

難しい顔の雅也——その一方、自席で机に向かって原稿を書いている一磨。

3 同・コンピュータ室

孝之、美彩、春奈がパソコンで作業をしている。

春奈「パンテーン、今日も部活休みだつてさ」
美彩「しようがないよ、生徒会選挙が近いんだもの」

春奈「対抗馬、確かそっちのクラスの子じゃなかったっけ？」

美彩「そうだよ。でも、私と五十川は当然パンテーンに入れる。(と五十川に)だよね」
孝之「もちろんです」

春奈「当選すると良いな。私も、できるだけクラスの子にはパンテーンを応援してもらうように言っとこ」

孝之「よっぽど、木内君のことなら大丈夫だ
とは思いますが」

春奈「その油断が、命取りになるかもしれないな
いよ」

孝之「そうですね。最後まで、結果はどうな
るか分かりませんね。それぞれに、いろい
ろ作戦もあるだろうし」

春奈「パンテーンって二組でしょ。二組のイ
メージが、全校的にどういうイメージ持つ
てるかによるけど、中には二組に対してあ
まり良いイメージ持っていない人もいるだろ
うから、そこがハンディかもしれないよね」
孝之「確かに、五組や六組みたいに進学クラ
スの人が立候補するのと、二組の情報活用
コースの人が立候補するのでは、全然印
象も違いますからね」

美彩「パンテーン、当選できると良いけど」
春奈「……」

難しい顔の春奈。

一磨が自席で原稿を書いている――

寧々が入ってくる。

寧々「あれ、まだいたの？」

一磨「ああ、濱口さん」

寧々「そろそろ帰らないと、定時制の子来ち

やうよ」

一磨「（時計を見て）あ、ほんとだ……もう

こんな時間なんだ」

寧々「どうしたの、一人残って」

一磨「生徒会選挙で使う推薦演説の原稿書いてたの」

寧々「そっか。ママの推薦演説やるの、かつちゃんなんだ」

一磨「うん。生徒会選挙に出るなんて、なかなかできないことでしょ。木内から頼まれたから、俺もちゃんとやろうと思ってさ」

寧々「人前で話すこと、全然慣れてないでしょ？」

一磨「うん。そもそも、全校生徒の前で話す

機会なんて、これまでなかったから」

寧々「じゃあ、結構緊張しちゃうんじゃない」

一磨「多分。でも、中学一年の時から仲だ

し、木内があんなに頑張ってるから、俺も

頑張らないと」

寧々「木内もかっちゃんなら安心できるんじゃないかな。頑張ってる、私も応援するから」

一磨「ありがとう」

寧々、微笑んで頷くと去っていく。

5 同・廊下（数日後）

雅也が歩いている。

N「そして、生徒会選挙当日が来ました」

と、壮吾が後ろから走ってくる。

壮吾「うっちー（と呼び止める）」

雅也「そーび」

壮吾、雅也の手に袋に入った飴を渡す。

壮吾「のど飴。お守りとして受け取って」

雅也「ありがとう……」

壮吾「かっちゃんと一緒に、頑張ってるね」

雅也「うん！」

6 同・体育館

生徒たちが次々に入ってくる。

× × ×

舞台上で演説をしている一磨。

一磨「僕は、二年二組木内雅也君を生徒会役員会計に推薦します。木内君はクラスの中の心的存在で、常に頼りになる存在です……」

隣でその様子を見ている雅也。

× × ×

舞台上で演説をしている雅也。

雅也「生徒会会計に立候補しました二年二組の木内雅也です。僕が生徒会選挙に立候補しようと思ったきっかけは、学校祭の実行委員会です。学校行事の運営に携われることの楽しさを知ることができました……」

その演説を聞いている二年二組の生徒たち。

N 「原稿は書いたものの、いざ全校生徒の前

で話そうと思うと言葉が飛びそうになり、僕はただ多少詰まっても良いから、自分の素直な思いを伝えようと思い、とにかく頭の中で伝えたい言葉を紡いでいました。その判断が正しかったのか、間違っていたのかは分かりません。でも、こうして生徒会選挙として人前で演説をしたことに後悔はありませんでしたし、何より人前で話すことに慣れていなかったちゃんが推薦演説を頑張ってくれたことに、僕はただひたすら感謝をしていました」

7 木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンでブログを書いている。雅也の声「今日は、生徒会役員の選挙がありました。結果は、まだ分かりません。明日にならないと……。正直、人前で話すのはとても緊張しました。何せ、全校およそ七百人の前での演説だったので。でも、実際に喋ってみると、そんなに。どうしてかつ

て？ それはこのお守りのおかげ。ありがとう
「

と、飴の写真を張り付けて、投稿する。

× × ×

宿題をしている雅也——パソコンに通
知が来る。雅也、パソコンの画面を確
認する。

雅也「コメント？」

と、ブログのページを開く——壮吾か
らのコメントが来ている。

壮吾の声「何かちっぽけなお守りでごめんな。
まあおいしく食べておくれ」

と、返信をする雅也。

雅也の声「物の大きさなんて関係ない。大事
なのは、心の大きさだよ」

と、壮吾からコメントの返信が来る。

壮吾の声「なんて良いことを言うんだ！ さ
すがは生徒会長に立候補しただけはある！

（笑）」

と、返信をする雅也。

雅也の声「会計なんですけど……」

返信を終える雅也、ふと険しい顔になると、手を合わせる。

雅也「どうか、当選してますように……」

8 中央高校・全景（朝）

9 同・S R 2 教室

雅也が不安な顔をして登校してくる。

雅也「おはよう」

一磨が雅也の席まで来ると、

一磨「昨日はお疲れ様」

雅也「こちらこそ。ありがとう」

と、西澤が入ってくる。

西澤「おはようございます」

一同「おはようございます」

西澤、掲示板に生徒会選挙の通知結果の張り紙をする。

雅也、一磨、良樹、康行、賢哉、悠喜、武、壮吾、寧々、優菜が張り紙の元に

集まる。

『木内雅也 368票 落選』と書か
れている。

一同「……」

雅也「（張り紙を見て）相手は374票。た
った六票で、負けた……」

と、その場に倒れそうになる——賢哉
と壮吾が慌てて支える。

賢哉「おい、大丈夫か！」

壮吾「うちー、しつかり」

雅也「（啞然として）そんな……六票で、た
った六票の差で、負けた……」

呆然とした顔で自席に戻る雅也——
磨も激しく落ち込んでいる。

一磨「木内……」

雅也「六票……六票……」
返す言葉もなく黙ったまま雅也を見て
いる一同。

雅也「……」

10 同・コンピューター室

孝之、美彩、春奈がパソコンで作業を
している。

美彩「パンテーン、残念だったね」

春奈「私は絶対当選してると思ってた」

孝之「わずか六票差ですからね……相当悔し
いでしょうね」

春奈「ねえ、こういう時って何て声かけてあ
げたら良いんだろうね」

美彩「分からない……」
と、雅也が入ってくる。

美彩「……」

春奈「……」

孝之「お疲れ様だったね……」

雅也「ありがとう……。良いよ、もう気にし
てないから」

春奈「けど……」

雅也「生徒会役員になることはできなかった
けど、みんなの票は有難かったよ」

孝之「……」

美彩「……」

春奈「……」

雅也「生徒会役員の立候補は、今回だけにするよ。来年の前期は、もっとみんなで学校生活楽しみたいからね。それに、今回選挙に落ちて、このコンピュータの副部長とクラスの学級代表に専念できるし、脚本の勉強もできるようになる。前向きに考えて、気楽に過ごす。俺はもう大丈夫だから」

春奈「パンテーン……」

雅也「過ぎたことを後悔しても辛いだけどもん。選挙が終わって、大分肩の荷が下りた。生徒会っていう看板を背負わずに、気楽にこれから学校生活送るから」

笑って返す雅也——やりきれないような顔の孝之、美彩、春奈。

11 門野家・賢哉の部屋

賢哉が瞬のブログを読んでいる。

賢哉「あいつ、大丈夫かなあ……」

と、雅也から着信がかかってくる。

賢哉「（電話に出て）どうした？」

雅也の声「ねえ、きのしゅん何かあったの？
すぐく病んでるような、自暴自棄みたいな
ブログ更新してるんだけど」

賢哉「ああ。彼女と別れたらしいんだ。それ
で、ちよつと病んでるんだと思う」

雅也の声「大丈夫かなあ。変な気起こさなき
や良いけど」

賢哉「大丈夫だろ」

12 木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンの画面を見ながら、携
帯電話で話している。

雅也「けどさ、さすがにこの文章はまづくな
い？ 俺の周りには、ロクな女がいない。
学校なんて特について。きのしゅんと別れた
人って、同じ高校の子なの？」

賢哉の声「同じクラスって聞いたぞ。多分学
校辞めたのも、その女といろいろあったん

だろ」

雅也「だからって、ブログにこんなこと書くなんて……こんなこと、学校に知れたらネツトトラブルの原因だって、生徒指導部が黙ってないんじゃないかな」

13 門野家・賢哉の部屋

賢哉「気にしすぎだよ、お前は。じゃあな、俺今から競艇のハイライト見るから」

14 木内家・雅也の部屋

雅也「え、ちよつとかどけん……。 (と携帯電話が切れ) あ、切りやがった……。」

15 門野家・賢哉の部屋

瞬のブログを見ている賢哉。
賢哉「コメントしといてやるか」

と、キーボードで文字を打ち始める。

16 木内家・雅也の部屋

難しい顔で瞬のブログを見ている雅也

——と、携帯電話に着信がかかってくる。優菜からである。

雅也「（電話に出て）もしもし優菜？ どうした？」

優菜の声「きのしゅんのブログ、あれ何？」

寧々も含めて、女子たちカンカンだよ」

雅也「ああ、それね……」

優菜の声「あれ、どういうこと？ あれって、誹謗中傷になるでしょ」

雅也「そうだね……。ただ、かどけんから聞いた話だと、彼女と別れてちよつと病んでるみたいなんだって」

17 杉山家・優菜の部屋

優菜が不機嫌そうに携帯電話で話している。

優菜「自暴自棄になってるからって、あんなブログを書いて良いっていうことにはならないでしょ。うちーだったら、そんなこ

と言われなくても分かってるでしょ」

雅也の声「それは、まあね……」

優菜「寧々、明日生徒指導部にこのこと伝えるって。本気だよ、寧々は」

18 木内家・雅也の部屋

雅也「けど、きのしゅんはもう学校を辞める人間でしょ。生徒指導部に報告したところで、どうにもならないでしょ」

優菜の声「じゃあ、このまま何もしないでおけどでも言うの？」

雅也「いや、そういうことじゃなくてさ……何とか穏便に事は進められないかな」

19 杉浦家・優菜の部屋

優菜「多分無理だよ。寧々は、明日の朝にでも生徒指導部に伝えるつもりらしいから。今回ばかりは、うっちゃーでも止められないことだと思おうよ」

20 木内家・雅也の部屋

雅也「そんな……」

激しく落胆している雅也。

21 中央高校・廊下

有賀が険しい顔をして歩いている。

22 同・職員室

西澤、佐藤、安代が仕事をしている――
――有賀が入ってくると、

有賀「佐藤先生、西澤先生、尾形先生、ちよ
つとよろしいですか？ 二組の生徒と四組
の生徒のことで、お話があります」

安代「（怪訝な顔で）はい……」

西澤「分かりました」

佐藤「その様子だと、また何かあったようで
すね」

難しい顔の有賀。

23 同・S R 2 教室

雅也、賢哉、悠喜、壮吾が談笑している——と、西澤が入ってくる。

西澤 「門野。今すぐ生徒指導室に行きなさい」

雅也 「（慌てて）先生、どういふことですか？」

西澤 「詳細は後だ」

賢哉 「分かりました」

と、渋々出ていく賢哉——啞然と見送る雅也たち。

N 「この時僕は、何故かどけんが生徒指導室に呼ばれたのか分かりませんでした。しかしこの事が、僕にとって学校生活における大きな岐路に立たされている状態になっていたとは、まだ知る由もなかったのです」

つづく